

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 菅野 直美	留学機関名 エドアルドモンドラーネ大学 アフリカ研究センター
留学先国名 モザンビーク共和国	留学期間 西暦 2013年9月～2015年8月
研究テーマ モザンビークにおける HIV/AIDS の蔓延による地域社会の変容と社会関係の再構築	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p><b>(1) 研究目的</b></p> <p>本研究の目的は、モザンビークにおいて HIV/AIDS が地域社会に及ぼす社会的・文化的影響のあり方を、個人と社会との関係性に注目して明らかにすることである。その際、HIV 陽性者の人びとの社会関係や日常実践に焦点を当てて社会関係の再構築の過程を示し、地域社会の変容を考察する。</p> <p>モザンビークは HIV/AIDS の感染率が上昇傾向にあり、その蔓延は住民の経済活動や家族構成に変化をもたらし、住民同士の社会関係を分断するなど、地域社会にさまざまな影響を与えている。特に、地域社会における HIV 陽性者に対する社会的排除、およびかれらと非感染者との間における境界の設定、といった問題は、地域社会における社会的関係の崩壊につながる懸念されている。</p> <p>これまでの研究では、個人と社会の関係性に注目して HIV 陽性者が抱えている困難や混乱を社会的文脈の中でとらえ直してみるという視点が欠如しており、かれらが直面している複雑な現状や、その中でかれらがとる行動の意味を理解することは極めて難しい。地域社会の中で、HIV 陽性者と非陽性者の間に横たわる社会的課題がいかなるものであるかを、モザンビーク社会の内側から分析することが課題となっている。申請者はこれまでの研究の中で、HIV 陽性者と医療従事者との間における HIV 治療実践の課題を研究してきた。今後は、HIV/AIDS の蔓延には地域社会の慣習が強く影響していることに着目し、HIV 陽性者にまつわる概念や社会関係などを地域社会の社会・文化的文脈で明らかにする。</p> <p><b>(2) 研究の意義</b></p> <p><b>① HIV/AIDS の社会学的研究</b></p> <p>これまでの HIV/AIDS の拡大が社会に与えるインパクトに関する研究は政策志向的傾向が強く、労働力不足による経済的困窮の増大、死後の財産相続等の社会的再編問題が指摘されてきた (Fostre &amp; Williamson 2000 など)。これに対して本研究は個人に焦点を当て、HIV 陽性者となる前と HIV 陽性者になった後の人びとの社会関係や日常実践を別々の独立したものとしてとらえるのではなく、感染/発症を知った日をターニングポイントとして連続した過程としてとらえ、いかに社会関係が再構築されるかを検討する点は、これまでの研究にない独創的な点である。</p> <p>参考文献: Foster, G. and Williamson, J. (2000). A review of current literature on the impact of on children in sub-Saharan Africa. AIDS, 14 (suppl 3): S275-S284.</p> <p><b>② モザンビーク研究</b></p> <p>日本および世界におけるモザンビークに関する研究は、他のアフリカ諸地域を対象とした研究と比べると、特定の分野(歴史・出稼ぎ労働研究等)を除いて極めて限られている。特に、1992 年の内戦終結後の都市社会を対象とした、長期の現地調査による実証的データに基づく研究は非常に少ない。本研究では、都市部における HIV 陽性者とかれらを取りまく人びとの個々人の視点および相互行為に焦点を当て、グローバルな流れが地域の文化的特性を帯びて形を変えていく過程を考察することによって、モザンビーク研究における都市地域社会の多元性を提示する。また、内戦後の復興に影を落とすことが懸念される HIV/AIDS の影響を分析し、グローバルな問題をミクロな視点で接合し、逆照射する点において意義深いものである。</p>	

# 成果報告書

記入日 2018年5月18日

氏名：菅野 直美	渡航先国名 モザンビーク	所属機関 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
研究テーマ：モザンビークにおける HIV/AIDS の蔓延による地域社会の変容と社会関係の再構築		
研究期間：2015年8月～2017年12月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>乳幼児の母親を対象に、子育てにかんする聞き取り調査を実施した。事例分析から、経済・社会的環境や医療環境が整っていない中で、母親たちが試行錯誤しながら家族の健康を維持していることを明らかにした。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p><u>0. はじめに-研究テーマの変更</u></p> <p>報告者は、当初、HIV 陽性者の日常生活およびかれらを取り巻く環境にかんする調査を予定していたが、かれらの多くは差別や偏見を恐れており、聞き取り調査は難航した。このため、調査をモザンビークにおける健康維持のあり方を明らかにすることに変更した。調査内容としては、乳幼児の母親を対象として育児方法や既往歴を聞き取り、また母子保健プログラムなどの保健政策について資料収集をした。</p> <p><u>1. 調査方法</u></p> <p>首都マプトから 40km ほど郊外に位置するボアネ地区を調査地として、0 歳から 2 歳までの乳幼児を持つ母親を対象として、質問票をもとに母乳育児や離乳食について、こどもの寝かせ方、日常生活でのこどもとのかかわり方など、育児にかんする聞き取りおよび参与観察を実施した。言語は通訳を介さず、ポルトガル語を用いた。</p> <p>1998 年にモザンビーク政府と外資系企業のアルミ精錬合弁会社が設立され、同地区には 2000 年および 2003 年に工場が建設された。これにより、同地区では水道と電気のインフラが整えられた。このような契機に加え、経済発展を見越した人びとが土地を購入して住宅建設ラッシュが起こっていることにより、同地区の人口は急激に増加している。</p> <p><u>2. 調査結果・考察</u></p> <p>はじめに、こどもの寝かせ方について説明する。母親たちからは、あおむけ、横向き、うつぶせに寝かせるという 3 つの回答があり、偏りはみられなかった。うつぶせに寝かせる理由について尋ねてみると、「腸が出っ張らず、おなかがぼっこりとしたこどもにならなくなるから」という説明があった。この説明の背後には、ひとつの要因が考えられる。モザンビークでは出産するとき、へその緒を少し長めに</p>		

切り、しばらくたってへその緒が自然ととれるのを待つことがある。しかし、実際にはおへその穴からぽこんとへその緒のなごりのようなものをもってこどもは成長する。成長してからでは、おへその穴のでっぱりが自然とへこむことはないので、乳幼児の時期に矯正させようとする試みであると考えられる。

医療施設や医療従事者が不足しているモザンビークにおいては、病院・クリニック訪問者が医療従事者に自由に質問する機会はほとんどない。また、出産にかんしては、妊婦は出産当日まで仕事をし、陣痛が始まったところに職場から病院にいき、そのまま出産にむかい、出産を無事に終えたら翌日には退院するというケースが通常で、医療施設に滞在する期間は非常に短い。このような状況では、妊婦はたとえ質問があったとしても、出産時にそれを口にする機会はない。「おなかがでっぱらなくなるように」という理由でうつぶせ寝を選択することは、限られた医療状況下において母親がわが子に対して取れる最大限の方略のひとつであるといえる。

つづいて、絵本を読むことについて説明する。乳幼児用の絵本を所有している母親は、ほとんどいなかった。こどもが絵本の内容を理解するには学齢期にさしかかっただけの年齢になる必要がある、と考える傾向がみられた。この背景には、慣習的にこどもたちは口頭伝承によって物語を聞いてきたため、母親自身が絵本を読んでもらった経験がないこと、モザンビークの物価水準に照らし合わせると絵本は非常に高価であるため、容易には購入できないこと、また、書店はマプト市に数軒あるのみなので、都市近郊の町では入手が難しいことが要因として考えられる。また、近年では携帯電話が普及しており、スマートフォンを所有している世帯も珍しくはない。このような家庭においては、こどもが触れたがると乳幼児の時期からこどもに携帯電話を触らせていることもある。携帯電話に慣れると、こどもは飽きることなく、手に取ろうとする。このことも、母親が、なじみの薄い絵本をあえて手に取る機会を少なくする一因となっていると推察できる。

最後に、3人のこどもをもつ母親Aさんにインタビューしたときの、二つの事例を紹介する。

ひとつめは、離乳についてである。Aさんは、生後16か月を過ぎたころあたりに離乳をしようと、ゆるやかに考えている。一人目のこども（娘）が16か月になった時、Aさんは娘が白いひもをこわがることに気がつき、娘が母乳をせがむときに白いひもを見せるようにした。娘はこわがって泣くのであやしたが、母乳を与えなかった。翌日も、娘は母乳をせがんだが、同じ方法で母乳を与えなかった。数日後、娘は母乳をせがまなくなり、離乳に成功した。二人目のこども（息子）の時、娘と同じ方法を試してみたが、息子は白いひもをまったく怖がらなかった。Aさんは思案し、庭に生えている苦みのある植物をすりつぶしてペースト状にし、胸部に塗った。何も知らない息子は母乳を飲もうとしたが、苦み成分に気がつきぼにゅを飲むのをやめ、不思議な表情を浮かべた。もう一度試してみたがやはり苦み成分により、母乳を飲むことはできなかった。同じことを数回繰り返したのち、息子はあきらめ、翌日からは母乳をせがまなくなった。Aさんは、「三人目のこども（息子・12か月）の時は、どのようにしようかしらね」と楽しそうに語ってくれた。

もうひとつは、誕生日のお祝いにかんしてである。彼女は次のように語ってくれた。モザンビークでは、1歳、5歳、18歳の時にそれぞれの節目としてお祝いをする。1歳は生後初めて1年を全うしたことを、5歳は幼稚園・保育園を卒業し、初等学校に入学するため、これからは誰もがそのこどもを赤ちゃん扱いしなくなるのでこどもにその自覚を芽生えさせるため、18歳は成人したことを、お祝いする。現在、多くの家庭においてこどものためにケーキを用意して親戚他を招いて盛大に祝う光景が見られるが、1977年から1992年の内戦時、そのようなことはできなかった。当時、両親は、いつもより少しだけ特別な扱い、たとえば、大きなお肉の塊をこどもにあげるなどして、お祝いをしてきていた。

ひとつめの事例からは、個々のこどもに合わせた育児方法を取り入れていること、身の回りにあるものを活用して育児をしていること、育児にかんしてゆったりと構えていることがうかがえる。また、ふたつめの事例からは、年齢に対する意味づけが世代を超えて伝承されていること、また、その形は時代に合わせて変わっていることがうかがえる。

以上、こどもの寝かせ方、絵本の所有の有無、離乳、誕生日について述べた。本報告には記載しなかったその他の項目についても、傾向を分析するとともに背後にある要因についても考察を進めていきたいと思っている。

### 3. 研究者とのネットワーク構築

毎週水曜日に実施されるアフリカセミナー、1か月に1回ほど開催される歴史学研究科の研究会に参加し、研究者との分野横断的なネットワーク構築をはかった。分野の異なる研究者からは、自分では気づかないような視点の異なるコメントやアドバイスをもらうことがあった。たとえば、30代とおぼしき男性研究者からは、「どうして、母親だけが聞き取りの対象なのか。自分にもこどもがいるが、妻は働いているので夫婦二人で協力して子育てをしているよ。確かに、モザンビークに限らずアフリカ社会では母親が育児の中心的な担い手であるけれど、最近は僕のようなケースも少しずつ増えてきていると思うよ」との率直な意見があった。一般的に、モザンビーク南部は父兄社会であり、若い世代においても「家事や育児は女性がするもの」という認識が男女ともに強い。一方、この研究者の意見にみられるように、伝統的価値観にとらわれない家庭の存在を見落としてはいけないことに気がつかされた。今回の調査では男性を調査対象とはしなかったものの、次回の調査時に男性を対象に加えることにより、分析を深めていきたい。

また、日系企業においてモザンビーク南部におけることばの用い方にかんして、サントーマス大学においてモザンビーク南部の子育て文化にかんする発表をした。学術的な交流とは異なるものの、日系企業からはモザンビークにおける事業概要をうかがうことができ、同国の経済・政治にかんするマクロな視点をもつことができた。サントーマス大学との交流においては、参加者の学生が熱心に質問・発言してくれたことにより、地域ごとの文化差を知ることができた。

帰国後も、現地で得たネットワークを最大限に活用していきたいと考えている。

### 4. 今後の課題

モザンビークの新生児死亡率は30/1,000人、妊産婦死亡率は408/100,000人と高い。今回の調査では、医療機関を訪問したり予防接種を担当している看護師や助産師ら医療従事者に聞き取りをすることはできなかった。今後、医療関係の調査を実施し、マクロデータの収集を試みたい。また、モザンビークでは、植民地からの独立戦争後の内戦時代に共産政権が敷かれていた。当時、国家主導で医療分野、教育分野、芸術分野に携わる人材選抜がなされていた。当時の資料収取にあたり、現在の医療政策・方針にどのような影響を及ぼしているのかについても明らかにしていきたい。

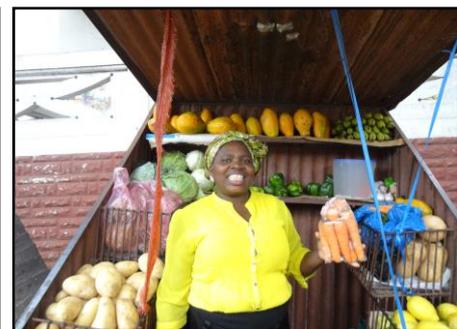
## 留学中の生活・研究でのトピックス

モザンビーク人は、とにかく陽気である。滞在中、その陽気さに励まされる一方、どんな状況にあっても陽気であることに不思議さを感じることもあった。そのひとつは、「Deixa」という語をいわれた時である。日本語にすると、「ほうっておきなさい」、「そのままにしておけ」といったところである。

たとえば、お金を貸した相手がお金を返さない場合、お金を貸した側もその周囲の人も「Deixa」といって、しつこく取り立てようとしなない。「返さないのなら、ほうっておきなさい」というわけである。借りた側は、「借りていることを覚えているよ。そのうち返すから。今は、こういう事情で返せないんだ」という。こういう場合、お金を何年越しも借りている状況にあることがほとんどで、当然戻ってこない。

報告者は、「どうせ返すことはないのだから、借りている側も『返すよ』などとあえていわず、黙っていたらいいのに」と思っていた。ある日、珍しく、お金を貸している友人が、借りている相手に「『返す、返す』というけれど、いつ返すのか」と聞くことがあった。相手は、最初はのりりくらしとかわしていたが、「返すといっているだろ！」と逆上する始末となった。もちろん、お金は返ってこなかった。

のちに、別の友人から「モザンビーク人は、悪いこと・状況に対してなにかすると、今よりも悪くなるかもしれないと恐れを抱いているから、そのままにしておくんだ」と聞かされた。どんな時も陽気にみえるのはそういうことか、「Deixa」をよく耳にするのはそういうわけか、と合点がいった。これを知ってから、少しだけモザンビーク人のことを理解でき、かれらとの距離が縮まったような気がした。



所属先の同僚（忘年会にて） インタビューに応じてくれた母子 いつも陽気な友人ドナ・ローザ

## 今後の社会貢献

下記の通り、二つの形での社会貢献を考えている。

ひとつは、今回の留学期間中に収集した資料・データの分析をさらに深め、博士論文の形としてまとめることである。現地滞在中には、所属先の同僚、インタビューに応じてくれた調査対象者、友人らに大変お世話になった。研究成果を論文として発信することで、私を支えてくださった方々をはじめ、社会貢献をしていきたいと考える。

もうひとつは、国際協力に携わり、これまでの研究で得た知見をいかしていきたいと考えている。滞在中、現地の人びとと濃密な時間を過ごすことにより、かれらの価値観、温かい人柄や懐の深さを知ることができた。モザンビークは最貧国のひとつであり、教育や医療、経済など、さまざまな分野において改善・発展が必要とされている。ともすると、開発プロジェクトは「費用対効果」の面のみを重視して実施・評価されがちであるが、現地の人びとの置かれている状況や社会規範、考え方を念頭に置きながら、現地の人びとに裨益する開発計画を策定・実施することで、研究成果を社会還元していきたい。

最後にこの場を借りて、貴重な機会を与えてくださった貴財団のご厚意にお礼を申し上げる。